
十日町市教育委員会 文化財課 年報 7

平成14年度 (2002.4～2003.3)

十日町市教育委員会 文化財課

文化財課年報7

目 次

I. 運 営

1. 文化財保護行政この一年	1
2. 文化財保護審議会の経過	2
3. 予算と決算	3

II. 指定文化財

1. 新指定の文化財	4
2. 指定文化財の保存と管理	6

III. 埋蔵文化財

1. 発掘・確認・試掘調査	7
2. 発掘調査報告書刊行事業	9

IV. 調査・研究

1. 調査報告 魚沼の祝い唄一天神囃子	大島伊一	10
2. 資料紹介	菅沼 亘	14

V. その他

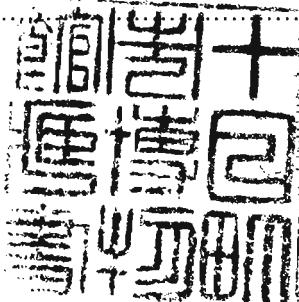
1. 文化財関連博物館事業	16
2. 文化財資料の保存と活用	18
3. 文化財資料の貸出	20

資 料

附：十日町の指定文化財一覧	22
---------------------	----

編集ノート－職員名簿	24
------------------	----

例 言



1. 本書は、十日町市教育委員会文化財課の平成14年度を中心とした活動記録である。

2. 本書の構成は、文化財課の業務を大まかに I.運営、 II.指定文化財、 III.埋蔵文化財、 IV.調査・研究、 V.他の5つに分類し、活動を報告する形とした。

3. 本書の原稿は文化財課の職員がそれぞれ担当を決めて執筆し、末尾に担当者の名前を記した。なお、 IV.調査・研究については紀要的性格に鑑みて記名原稿とした。

4. 提出された原稿は、できるかぎり原文を尊重した。ただし、内容・表記等については、執筆者の了解を得て編集者が修正したものもある。

5. 本書の編集は竹内俊道が担当した。

I. 運 営

1. 文化財保護行政この1年

始めに平成14年度の文化財課の活動を概観する。
《文化財保護審議会》

第16期委員改選があり、樋熊清治会長、佐野良吉職務代理、須藤重夫委員が退任され、後任に丸山克巳氏、井上信夫氏、宮沢孝美氏の3氏が任命された。会議で、会長に大島伊一氏、職務代理者に武田正史氏が選任された。委員の任期は平成16年6月11日までである。会議は年4回開催された。

《文化財指定》

教育委員会は、平成15年2月13日に「水沢地伝統芸能保存会」の『石場かち』を市指定文化財することについて文化財保護審議会に諮問した。

文化財保護審議会は、2月25日に審議会を開き市の指定文化財とすることが妥当である旨の答申をした。これを受けて、3月24日の教育委員会で市の文化財として指定することを決定し、同日告示された。
《指定文化財の管理等》

市指定文化財である「鉢の石仏」の地盤補強修理と「枯木又のカスミザクラ」が雪による倒木の恐れがあるため、補強及び枯枝の伐採工事を実施した。

《発掘・試掘調査》

今年度は前年度より発掘・試掘箇所数が多く、宅地造成に伴う水沢館跡、土砂採掘で発見された宮栗遺跡、宅地造成による馬場上遺跡周辺、中世城跡孤城、特養施設関連で四日町地内、県営基盤整備事業新水4か村地区の内菅沼、県営農地環境整備事業枯木又地内、県営住宅事業小泉地内、団体営ほ場整備美佐島地内、店舗拡張による下島地内（ホームセンタームサシ）、土地改良による城之古地内そして笹山遺跡周辺範囲確認調査の12件の発掘・試掘調査を行なわれた。別に発行する「平成14年度十日町市内遺跡試掘・確認調査概要報告書」も併せて参照していただきたい。

《出土遺物の整理》

県緊急地域雇用創出特別基金事業で実施した。
(社)十日町地域シルバー人材センターに委託し5か月間4～6人が土器の水洗いと注記作業に従事し、概ね200箱が処理された。今後発掘調査報告書にまとめるための重要な作業である。

《発掘調査報告書の作成》

昨年度から阿部恭平前副館長が嘱託としてこの仕事に専念し、本格的な発掘調査報告書作成に向けた資料・図面等の整理をすすめてきた。その結果、13

年度～14年度の2か年間で懸案であった「馬場上遺跡」の報告書が刊行された。

《課題と展望》

13年度から市長部局直轄で進められてきた「国宝館・火薬の都」整備事業基本計画が8月発表された。笹山遺跡の保存と活用の問題は文化財担当課としても重要な課題であり、連絡を密にして今後対処していくなければならない。しかし、計画を具体化していくには、長期計画への採用、市民や地元中条地区の意向、土地の確保と財源問題等々、幾多の問題や懸案があることも事実である。遺跡の範囲確認調査は今年度は野球場の西側を、一辺が2mの正方形で深さ2.5m～3mの試掘を9箇所行なった。15年度も引き続き試掘する予定である。

笹山遺跡の史跡指定地の史跡指定同意について、只一人の未同意者がおり、今後の国・県の史跡指定、ひいては火薬の都計画の実現に向けて障害の一つになっていたが、地元のねばり強い協力を得ながらようやく同意を得ることができ、今後3か年間の遺跡指定保障料契約を他の18人の地権者と歩調を揃えることができたことは、大きな前進と思う。

国宝の管理については、貸出しの問題もある。発見・復元以来、約20年が経過しており、加えて文化庁の依頼により平成4年以来、米国・仏国・英国と海外への出展が続いたことなどから、特に火薬型土器No.1については、新たな亀裂が見つかるなど劣化が進み保存上問題を残した。文化庁の指導もあり、今年度から4年間にわたり11点の国宝土器を解体修理することを「長期発展計画」に計上し、今年度は、No.1とNo.6の2個を文化庁指定の業者に委託し、12月に解体・修理が完了した。こうした取組みのほか貸出し制限等も行い、保存・活用をはかりたい。

その他、市街地化の進展によって土地に絡む文化財が壊される危険度の高い、信濃川河岸段丘端に分布する中世城館跡群の保存についても、できるだけ早く実態の把握に努め、将来展望を示さなければならない。こうした課題を念頭に置き、将来を見据えた文化財行政を進めていきたい。

1年間各種事業等の実施に際し、ご指導・ご協力いただいた関係者各位に心から感謝申し上げる。

（上村松雄）

2. 文化財保護審議会の経過

平成14年度 6月11日を以て第15期の委員任期が満了し、12日付で第16期委員7名が委嘱された。

◆第1回 6月21日(金) 13時30分～15時30分

《出席者》田村喜一、大島伊一、庭野政義、武田正史、宮沢孝美、丸山克巳、井上信夫の各委員。事務局：井口教育長、上村、竹内、太田、菅沼。

《内容》

最初に、委員の互選で会長に大島伊一氏を、職務代理者に武田正史氏を選任。大島新会長から就任の挨拶があった。会議は、4月からの事務局体制や職員の紹介の後、今年度の指定候補物件について、事情聴取と審議が行なわれた。結果、水沢地区の石場かちを候補とすることに決定。陳情の出でいる下条の天神囃子は継続審議とした。又、問題となっている滝文旧社屋は、指定文化財より民間で活用をはかるべきであり、場合によっては登録文化財でどうかとの意見であった。続く報告事項では、発掘調査予定と 笹山遺跡出土No.1、No.6土器の解体保存修理、馬場上遺跡発掘調査報告書の刊行の進捗状況等について、担当より報告説明が行なわれた。

◆第2回 10月17日(木) 8時～18時30分

《出席者》大島会長、武田職務代理、田村、大島、庭野、武田各委員。事務局：上村、竹内、菅沼と博物館の林、企画人事課の石原。

《内容》

博物館協議会委員（5人）と合同での視察研修。山梨県立考古博物館で開催中の「技と美の誕生－名宝でつづる縄文文化－」を視察した。この展覧会には当博物館の国宝火焰型土器も出品されている。

到着後、県立考古館の沿革・役割等について説明を受けた後、展示室を中心に縄文土器の名宝の数々を見学。縄文文化への理解を深めた。展示はシンプルな構成で本物の持つ迫力を伝えていて、参加者に生の感動を与えていた。なお、火焰型土器は入口の一角を与えられ、来館者の注目を集めていた。

その後、施設内容や来館者等への対応、事業展開等に委員はじめ参加者から質問が出され、活発な意見交換が行なわれた。

◆第3回 12月3日(火) 13時30分～15時30分

《出席者》大島会長、武田職務代理、田村、庭野、宮沢、井上の各委員。事務局：上村、竹内、太田、菅沼。

《内容》

審議では始めに、石場かちの製作ビデオの試写を行ない、続いて物件内容の検討と指定名称等について、次回答申に向けての審議を行なった。委員は8月に行なわれた保存会による石場かちの復元実演も実見しており、指定に向けた準備にかかるよう発言があった。天神囃子の今年度の指定は見送り引き続き審議するととなった。また、報告では発掘調査、報告書作成、新年度文化財課の方針・重点と主な事業と予算等について事務局より説明が行なわれ、それぞれ了承された。

その他で、井上委員からブラックバス繁殖が問題になっている大池の再生プロジェクトの説明が行なわれ、自然保護の問題提起がなされた。文化財審議会として環境保護へ対応が必要との意見や、文化財審議会の役割の重要性について意見が出された。

◆第4回 2月25日(火) 午後1時30分～3時30分

《出席者》大島会長、武田職務代理、田村、庭野、宮沢、丸山の各委員。事務局：井口教育長、上村、竹内、太田、菅沼。

《内容》

指定候補物件、無形民俗文化財・風俗習慣として水沢の石場かち1件について審議。全員一致で指定に同意。答申書を教育委員会（教育長）に提出した。

その後、新年度の事業と予算について等の報告がなされました承認された。又、長年懸案だった 笹山遺跡史跡指定未同意者から、昨年末に同意を得た事も報告された。

《関連行事》

△ 8月21日(水) 14時から水沢新宮地内で、保存会による石場かちの復元実演があり、委員事務局の有志で視察。保存会・文化財課共同で再現ビデオ製作に取り組んだ。

△文化財保護研修会（中魚沼郡・十日町市社会教育振興会主催）於津南町公民館 11月20日(水) 13時30分～17時。委員5名、事務局2名が参加した。

（竹内俊道）

3. 予算と決算

平成14年度の予算の特徴は、市指定史跡である国宝出土地・笛山遺跡の敷地補償料の期限が年度内の12月始めて切れるのに伴う、3年間の延長分を盛り込んだ事である。その他、国庫補助事業による国宝保存修理事業の開始、発掘調査報告書の刊行費が認められ、緊急地域雇用特別交付金での遺物整理事業が継続される事になった。年度当初の予算は昨年に比べ146.2%の28,122千円。補正予算を経て決算は24,256千円となる見込みである。

内容は大別すると(1)一般経費、(2)文化財保護調査費、(3)埋蔵文化財関係経費からなる。

(1)は経常経費で、文化財保護審議会の開催、車両の

維持管理などで、ほぼ前年度並みである。

(2)では、指定文化財管理委託料、補助金に加え前述の笛山遺跡指定補償料が組み込まれている。なお、前年で県指定文化財神宮寺観音堂・山門の茅屋根保存修理事業が終了したため、この分の補助金は減額となっている。

(3)では、今年度も試掘確認調査事業に国県の補助を入れ、11カ所の試掘に取り組むとともに、国宝館・火焔の都構想に基づく笛山遺跡範囲確認調査を実施。懸案だった馬場上遺跡発掘調査報告書も刊行した。また、緊急地域雇用特別交付金での遺物整理を引き続き実施している。

(富井寛人・竹内俊道)

歳入予算（決算見込）

(単位：千円) ※3月19日現在

12款 国庫支出金	2項 国庫補助金	5目 教育費国庫補助金	
節	説明	予算額	決算見込額
4. 社会教育費補助金	25. 遺跡調査遺物整理補助金	3,000	3,000
	26. 国宝修理保存補助金	1,250	1,250
13款 県支出金	2項 県補助金	7目 教育費県補助金	
3. 社会教育費県補助金	20. 遺跡調査遺物整理補助金	1,000	1,000
	36. 国宝修理保存補助金	625	625

※他に、労働費予算で緊急地域雇用特別交付金事業補助金3,000千円がある。

歳出予算（決算見込）

(単位：千円、千円未満切り上げ) ※3月19日現在

節	説明	予算額	決算見込額
1.報酬	文化財保護審議会委員報酬188・嘱託職員報酬4,800	4,988	4,932
7.賃金	臨時職員賃金1,962・発掘調査人夫賃金3,705 遺物整理人夫賃金1,890・文化財保護人夫賃金ほか170	7,727	7,677
8.報償費	指導者謝礼ほか	406	333
9.旅費	費用弁償47・普通旅費190	237	179
11.需用費	消耗品費597・燃料費20・印刷製本費1,368・修繕料190	2,175	1,997
12.役務費	手数料21・保険料138・通信運搬費560	719	719
13.委託料	指定文化財管理522・遺物整理作業2,000 遺物実測作業74・笛山遺跡範囲確認調査1,000 国宝土器修理保存作業1,750	5,346	5,346
14.使用料ほか	コピー使用料288・発掘用重機借上料251	539	520
15.工事請負費	指定文化財保存工事	170	170
16.原材料費	遺構保存用原材料	43	43
18.備品購入費	文化財資料	150	150
19.負担金ほか	指定文化財保存修理事業費補助金	120	120
22.補償料	笛山遺跡指定補償料	2,122	2,056
27.公課費	自動車重量税	14	14
合計		24,756	24,256

II. 指定文化財

1. 新指定の文化財

平成14年度には、無形民俗文化財1件を市の指定文化財に指定した。

これにより、市内の指定文化財件数は合計46件となった。(巻末指定文化財一覧表参照)

◎水沢の石場かち

《種 別》 無形民俗文化財 風俗慣習
《保存団体》 水沢地区伝統芸能保存会
会長 金沢友一
事務局 水沢地区公民館内

《文化財の現状》

建築基準法(昭和25年法律201号、昭和27年4月1日施行)の定めにより、全国各地にあった伝統的な家屋の土台固めの方法である石場かちは姿を消してしまった。こうした方法や作業に伴う伝統的風俗習慣や労働唄は次第に忘れ去られている現状である。

十日町市内でも同様な状況であるが、水沢地区ではこの現状に対し、昭和47年「水沢石場かち保存会」を組織し、郷土芸能として石場かちの保存伝承に努めてきた。その後、平成8年には水沢地区伝統芸能保存会に組織を改編し、石場かちの棟梁を努めたことのある経験者で、水沢地区新宮に在住の元大工棟梁、宮沢吉平翁の指導を受け、往時の風習を受け継ぎながら石場かち作業と唄の継承と保存・普及に努めている。

《文化財の由来と概要》

「石場かち」とは、建築をする時の地掘き作業、地固めの作業をいう。

昔は家を建てる時、土台となる石(石場石)の上に柱を立てたが、その石場石を掘き込む石場かち作業に賑やかに唄われたのが石場かち唄で、陽気な労働唄である。

石場石を掘き込む道具をドーヴキと言うが、直径50センチ、高さ約2.5メートルの松又は櫻の丸太に井桁のように根取り木(舵取り)を付け、上下の端からツキナワを四方にとってある。ドーヴキの頭頂には幣束、榊、鉋の削り葉をつける。

ツキナワには村中の老若男女がすがり、音頭取りの朗々と唄い上げる石場かち唄で、力をそろえて掘き込む。根取り木につかまってドーヴキを持ち上げ、石場石を掘き込む役は、威勢のいい若者たちで、根取りと呼ばれ、舵取りの役目をする。

なお、石場かちの手順や内容について、「宮沢翁の指導」として聞き取り内容をまとめ資料として、再現ビデオとともに添付されている。

現場はめでたい普請場であるから、ふんだんに酒も振舞われ、即興的な唄がされることも多かった。なお、石場かちの始まる前と後には、石場かち唄を挟んで祝い唄の天神囃子が唄われた。

《その他参考となる事項》

○水沢地区伝統芸能保存会について	昭和47年(1972) 水沢地区公民館利用者有志等が集まり、市民芸能大会に参加し、好評を得る。
同 年	水沢石場かち保存会を設立。 織物組合求評会や雪まつり等に出演。
	その後会員の老齢化等により活動停滞。
平成8年(1996)	水沢地区公民館利用者団体協議会設立。 会の中から有志34名を募り「水沢地区伝統芸能保存会」が発足。石場かち保存会の活動を引継ぎ新たに活動を再開現在に至る。

《指定理由》

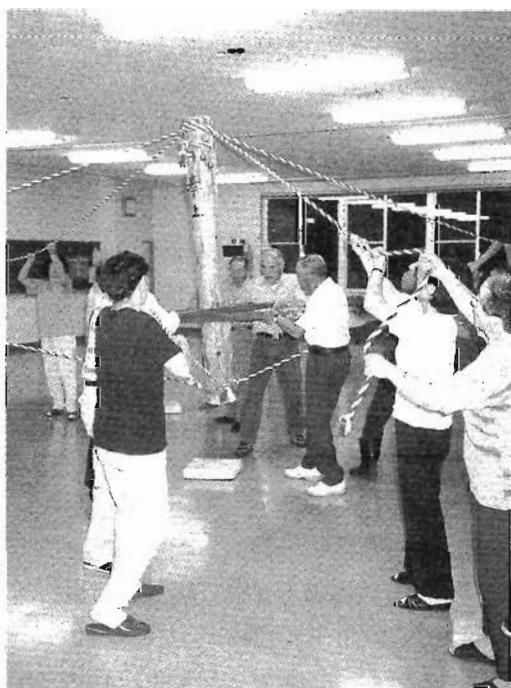
伝統的な家屋の土台固めの方法である石場かちは現在既に姿を消してしまった。こうした方法や作業に伴う伝統的風俗習慣や労働唄は次第に忘れ去られている現状である。その行事を蘇らせ、後世に長く伝えて行くことは地域文化伝承としても価値あることと言わなければならぬ。

特に水沢地区では、水沢地区伝統芸能保存会を組織し地域挙げて石場かちの保存に取り組んでいる。更に、石場かちの棟梁経験者の指導を

受け、往時の風習を再現し記録するとともに、その伝統を受け継ぎながら伝統芸能として石場かち作業と唄の継承と保存・普及に努めている。

こうした地道な作業は、地域社会に根差していた伝統的風俗慣習を次代に伝えるとともに、地域に生きた人々の鼓動を子孫に伝える大切な作業であり、文化財として保存する価値がある。

(竹内俊道)



練習風景



地鎮祭



掲込み



軟弱地盤の補強



子どもによる石場かち



掲込み完了

2. 指定文化財の保存と管理

■指定文化財標柱設置事業

文化財に指定された物件について、その存在を明確にし、広くその存在を知らせる意味で、屋外の指定物件（建造物、史跡、名勝、天然記念物など）を対象に文化財標柱を設置している。標柱は木柱のため数年で朽ちてしまうので順次立替えが必要となる。14年度の巡回の結果、まだそれほど腐蝕が進んでいる標柱は見当たらず立替えは実施しなかった。

■指定文化財説明板設置事業

標柱と同様、屋外の指定物件に順次設置している。指定文化財に近接して設置し、文化財の概要などを記して見学者の便をはかるとともに、文化財の保護意識を育むことを目的としている。12年度で屋外の指定物件についての説明板設置は完了しているため、14年度も新たな設置はなかった。

■文化財保存管理委託・補助事業

市教委では、指定した文化財の保存・管理等のため、所有者・管理者に対し管理委託と補助を定額で行なっている。管理委託の対象となる文化財は、清掃・雪廻い・除雪などが必要な屋外の物件であり、補助の対象は、無形民俗文化財のうち伝承にかかる内容のみである。内訳は巻末資料参照（23頁）

■文化財保存修理事業

(1)県指定の建造物「神宮寺観音堂・山門」茅屋根葺替工事が、平成8年度から6年計画で行なわれていたが、13年度で終了したため、14年度の事業実施はなかった。

ただ、茅屋根の維持には毎年の補修を必要とするので、神宮寺では今年も単独で、観音堂東側の茅屋根部分修理を実施している。

■その他

(1)鉢の石仏指定地内周辺補修

鉢の石仏指定地境内の一部が、雨水等で土が流失し、地盤が低下して、石仏本体にも影響がでる恐れある旨、管理者から連絡が入った。担当者は現地確認後、保存会と協議して、地元保存会で対応するよう依頼。費用は、工事に携わった作業員の人夫賃金として予算の範囲で支出した。

(2)枯木又のカスミザクラが雪による倒木の恐れがある旨、地元からの連絡があり、現地で確認。管理者と相談して、枯枝の伐採と補助材による倒木防止のための補強工事を実施した。

(3)所蔵文化財資料の整理と補修等

人夫賃金を使い、重文指定物件内の金物資料を入れし、民具資料等の補修及び整理を行なった。

(4)文化財及び博物館研修

3月4日に、博物館展示技術のオーソリティー丹青研究所顧問の佐々木朝登氏から、文化財・博物館資料の活用を中心にご指導をいただいた。その後、職員・関係者に博物館と文化財資料の保存と活用についてを含む、これから博物館のあり方を講演いただいた。

(5)銃砲刀剣類等登録取り扱い

14年度の登録取扱いはなし。

(6)カモシカの食害

8月末、六箇地区の山間地田圃で、カモシカの食害が発生したとの連絡を受け、県教委文化行政課に連絡。同課の職員とともに現地調査をおこない、文化庁に報告した。平成9年、12年に次いで三度目の報告となつたが、近年カモシカが増えているようで、日撃情報が度々寄せられている。

被害者には自衛をお願いするばかりでこれといった対策がとれず、頭が痛い問題である。県を通じて文化庁の指導を仰いでいるが、はかばかしい進展はない。

（竹内俊道）



鉢の石仏土盛り作業

III. 埋蔵文化財

1. 発掘・確認・試掘調査

平成14年度の十日町市における発掘調査の内訳は、本発掘調査1件、確認調査4件、試掘調査7件の合計12件にのぼった。調査原因は、住宅関連3件、残土置き場1件、土砂採取1件、農業基盤整備事業関連4件、ホームセンター増設事業1件、社会福祉施設建設事業1件と笛山遺跡範囲確認調査事業1件である。以下調査概要を簡潔に記す。

本調査

①水沢館跡（市内水沢地内）

水沢館跡は、信濃川右岸の河岸段丘上の縁辺部にあり、中里村との境界付近に位置している。近くには、善光寺街道がはしる。

調査は、宅地造成に伴い昨年度の秋口から本年度5月末まで行なっている。調査面積は約325m²である。発見された遺物は、青磁、白磁、かわらけ、珠洲焼、肥前焼、瀬戸・美濃焼、越前焼、鞆の羽口錢貨、炭化米、柱の礎石等である。遺構は、Pit約600基、溝（空堀？）跡2基である。Pitの検出状況から南北8.5m×東西11.5m、南北6.7m×東西4.0mを超える大型建物が2棟存在したことが確認されている。

遺物等からこれらの建物は、15～16世紀のものと考えられる。館跡の東方約650mには要害城である桃山城があり、ペアをなして機能したと考えられている。また、その間には寺院があったと伝えられていることから、周辺には集落跡が存在する可能性が高い。北方約800mには馬場館跡があり、中世集落の支配形態を考える上で貴重な遺跡であるが、館主（城主）については、史料的根拠はなく不明である。しかし、当地方は中世新田支族が上野国から、所領を得て移り住んだと伝えられていることから、それに関連する領主の館である可能性が高い。



水沢館跡全体写真

確認調査

①狐城跡（市内中条峠地内）

狐城跡は、本年度約400m²の調査を行なった。主に副郭部分、副郭と主郭を分ける空堀の幅及び深さ、主郭部分の遺構の残存状況、城跡東側の堀の再確認を目的とした。

出土した遺物は、縄文土器、打製石斧、剥片類と近世～近代の陶磁器類である。城跡と関連性のある中世遺物については、発見されなかった。また、遺構についてはPit類が約42基検出されている。副郭と主郭を分ける空堀は、上幅約3m、約底幅2m、深さ約2mであった。また、主郭側に盛られていたと思われる土壘については、畑地造成に伴う重機による掘削等すでに存在しない。

②宮栗北遺跡（市内土市地内）

宮栗北遺跡は、本年度約600m²の調査を行なった。出土した遺物は、縄文土器、打製石斧、剥片類である。遺構は、Pit、風倒木痕が検出されている。

③馬場上遺跡（市内西本町地内）

馬場上遺跡は、信濃川右岸の河岸段丘上の縁辺部にある。現在は西小学校があり、建設時の調査で、古墳時代・奈良・平安・中世に至る住居や建物跡が、59棟確認され、同時代の妻有の歴史を考える上で大変貴重な遺跡であることが分かっている。今回、周辺部においてアパート建設が計画されたため、確認調査を実施した。出土した遺物は、土師器、須恵器、青磁、珠洲焼、肥前焼、瀬戸・美濃焼、炭化米、磨製石斧等である。遺構はPit類が92基と溝（堀）の一部が検出している。溝（堀）からは珠洲焼片が主に出土していることから中世以降の遺構である可能性が高い。同遺跡は、今回の調査で実に8回の調査を行なっているが、周辺部は宅地開発等が今後も考えられ、十分に注意を要する遺跡である。



作業のようす

試掘調査

①どうじょう林遺跡（市内四日町地内）

どうじょう林遺跡は、四日町祇園社の裏手にある。社会福祉施設建設事業に伴い試掘調査を行ない新しく発見されたため、継続して調査を行なった。約40m²の範囲を調査した結果、出土した遺物は、縄文土器、打製石斧、白磁、錢貨等である。また、多量の近現代廃棄物が棄てられていた。遺構については検出されなかつたが、舶来の白磁が1個体完全な形で、渡来錢（6枚）を伴って出土している。市内でも初めてのことである。

遺跡の周辺には、神宮寺・真淨院の古刹があり、「どうじょう」の由来は禅宗寺院の道場から来ているとも伝えられており、有力者の塚等が存在した可能性が高いと思われる。

②大道下遺跡（市内小泉地内）

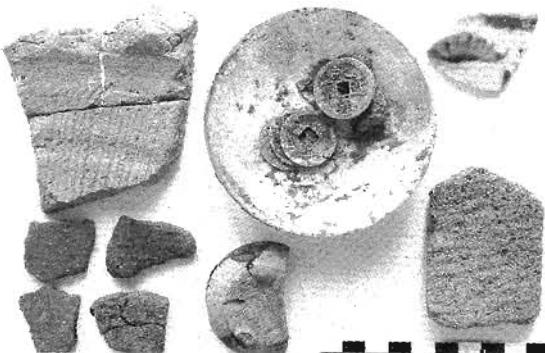
大道下遺跡は、住宅団地造成事業に伴い新しく発見された。既に田区として一次整理が済んでいるが、近隣に石橋遺跡（縄文）が存在するため試掘調査を行なった。その結果、縄文土器等が出土したため、15年度4月中旬頃より遺物・遺構の保存状態を確認する為、調査を実施する予定である。

③江道A・B・C遺跡（市内江道地内）

江道A・B・C遺跡は、集落地域整備統合事業美佐島地区（第1期工事区）に伴い、発見された。出土した遺物は珠洲焼、土師器、陶磁器類である。江道A遺跡においてはPitも検出しており、15年度に発掘調査を実施する予定である。

④その他

県営担い手育成基盤整備事業新水四ヶ村地区（菅沼工事区）、県営農地環境整備事業枯木又地区（家



試掘調査によって出土した遺物

平工事区）、団体営基盤整備促進事業羽根川地区、ホームセンタームサシ増設地区（十日町下島）で調査を実施したが、遺跡の発見には至っていない。

笛山遺跡範囲確認調査

十日町市は、平成14・15年度に国宝火焔型土器等出土土地である、笛山遺跡の範囲確認調査を実施する。遺跡指定範囲外からも耕作等で、土器等が出土しているためである。今年度は、市営笛山野球場の南側で縦横2m、深さ3mの試掘坑を9箇所設定し、遺物の有無、土石流の影響範囲、土石流の下層に縄文時代の生活面があるのかどうかを確認した。その結果、数箇所で縄文土器や縄文時代の生活面を検出することができた。

遺物の整理

発掘調査の結果出土した遺物の水洗・注記の1次整理と分類・整理・接合・復元・拓本・実測の2次整理を行なっている。

確認・試掘調査によって出土した遺物については、国・県補助事業経費の中で整理を行なっている。成果の一部は『平成あ年度十日町市内遺跡試掘・確認等調査報告書』にまとめられる。また、十日町市は長期発展計画に基づき、報告書作成事業を進めている。本年度は『馬場上遺跡発掘調査報告書』が予定どおりに刊行される。しかし、平成20年度刊行予定の野首遺跡については、未だ水洗・注記の済んでいない遺物が平箱に約580箱あるため、緊急雇用対策事業経費の中で一次・二次整理を早急に進めている。二事業とも11月より着手している。

野首遺跡は、火焔型・王冠型土器の出土量では国宝出土地である、笛山遺跡を凌ぎ県内でも注目を集めている。

（太田喜重）



整理作業のようす

2. 発掘調査報告書刊行事業

平成10年度より整理作業を進めてきた『馬場上遺跡発掘調査報告書』が、今年度ついに刊行された。1974年に第1次調査が開始されてから30年近い月日を経て、ようやく長年の懸案事項のひとつを完了することができた。

馬場上遺跡は市博物館と市立西小学校の周辺に位置する。遺跡では、1974・1975・1980・1984年に西小学校・市道建設に伴い計6回の発掘調査が行われ、古墳時代中・後期、奈良・平安時代の集落跡が発見されている。とくに、1974・1975年に行われた第1～4次調査は、当時としては県内初の大規模な古代集落の調査であった。また、のべ2,000人の市民が調査に参加し、「市民の手による調査活動」として注目を集めている。最近では、2000年に水田改良、2002年にアパート建設に伴い確認調査が行われるなど、市街地ということもあり遺跡周辺には各種開発行為が進みつつある。

今年度の作業経過と体制、報告書の体裁などは、以下のとおりである。

作業経過

平成14年

4～5月 遺構トレース原図作成、土器の分類・観察

6～8月 遺構図トレース作業、土器の分類・観察

9～11月 原稿執筆、版組み、遺物観察表作成

12月 編集、入稿

平成15年

1～3月 校正、印刷、納品

作業体制

遺構担当：阿部恭平（文化財課嘱託）

遺物担当：菅沼亘（文化財課主任）

編集：菅沼亘

整理補助員：山田敏枝・上野洋子（臨時職員）

整理作業員：高橋桂子

報告書の体裁

名称：十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

『馬場上遺跡発掘調査報告書』

体裁：A4判、横書・一段組

頁数：総頁数 213頁

本文 73頁 観察表 19頁

図面図版 82頁 写真図版 39頁

紙質：表紙 215kgレザック

本文・観察表 70kg書籍用紙

図面図版 90kg上質紙

写真図版 90kgアート紙

印刷部数：500部

遺物整理にあたり、高橋勉・春日真実・尾崎高宏氏より有益なご教示をいただき、また、遺物の写真撮影では山内景行氏、原稿入力では板橋恭子・田村明美氏よりご協力いただいた。お礼申し上げる。

なお、本事業は平成11年度より十日町市長期発展計画の中で継続事業として位置付けられている。平成15～20年度の刊行計画は表のとおりであり、出土遺物が市指定文化財に指定されている重要遺跡を優先して報告書を刊行する計画となっている。

（菅沼亘）

遺跡名	遺跡の概要	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	担当
伊達八幡館跡	調査年：昭和62年 時代：縄文、中世 それぞれが空堀によって区画された主郭と副郭をもつ居館跡である。 出土品は、市指定文化財（平成11年）。	整 理 2,485千円	3 月 刊 行					菅沼 阿部 補助員2
幅上遺跡	調査年：平成2年 時代：縄文中期 掘立柱建物30棟、竪穴住居11棟、 土坑7基よりなる環状集落跡である。 出土品は、市指定文化財（平成12年）。		整 理	整 理	3 月 刊 行			菅沼 補助員2
野首遺跡	調査年：平成7・8年 時代：縄文中・後期 竪穴住居12棟、掘立柱建物6棟、 配石遺構28基（後期）、土器捨て場（中期）などからなる環状集落跡である。	整 理	整 理	整 理	整 理	整 理	3 月 刊 行	菅沼 補助員2

重要遺跡発掘調査報告書刊行計画

IV. 調査・研究

魚沼の祝唄 天神囃子

大島伊一(十日町市文化財保護審議会会長)

はじめに

魚沼のほぼ全域と古志・刈羽・東頸城の一部にかけては、「天神囃子」が松坂と並んで祝い唄の双璧として君臨している。

この唄が当地方の祝いの席にとって欠くことの出来ない、大切な唄となったのはいつ頃なのか。又、この唄の生い立ちや背景、分布状況、唄の意味するところは何なのかななどを記してみたい。

唄の用い方

天神囃子には沢山の歌詞があるが、地域により若干の差こそあれ、それぞれの歌詞の出番は大体決まっている。一般的の酒席では、口切りに「大根種」が歌われ、納めの歌は「八幡の森」が登場してお開きになるのが普通のパターンである。

しかし、特別の用い方もいくつかある。例えば
○蔵開きや年貢納めの際には、

めでたいこれのお台所 お釜七つ八つ
後ろに蔵が 九つ

(十日町市北鎧坂)

○建前の際には、

御門の上の鶯が鶯が これの旦那様
ご知行増やせと さやづる

(十日町市八幡)

○田打ちの際には、

太郎じの望みの唄が出た 唄が出た
土手を越えるとも 鍬柄立ちの若衆

(十日町市名ヶ山)

○田打ちの後の振舞いには、

田主の望みの唄が出た 唄が出た
畔を越えるとも 鍬やづるつくな若衆

(十日町市八幡)

○水入(地主と小作契約を結ぶ)時には、

御門の上の鶯が鶯が これの旦那様
知行増せ増せと さやづる

などである。

又、十日町地方の祝言では、まず最初に、

めでたいものは大根種 大根種

花が咲きそろうて 実のやれば

俵 重なる

咲きそろうて 実のやれば

俵 重なる

が唄われ、お色直しの時に、中唄として、

だが子でござる めめが良い めめが良い

蕎麦の種だやら角がある 人の子でする

種だやら角がある 人の子でする

が披露され、最後の膳あげには、

八幡の森に宿とれば 宿とれば

宵に鐘がなる 夜明けに 森の巣鳥

鐘がなる 夜明けに 森の巣鳥

で締め括る仕来りになっており、極めて格調の高い披露宴が行なわれている。

天神囃子が「大根種」とか「八幡の森」の別称で呼ばれるのにはこんな訳が有るのである。

その他、大きな声を張り上げて唄うので「大鳴り」と呼ぶ所もあるし、「田打ち唄」とか「肥ちらかし」という場合もあるが、これはその昔、田打ちの折の労作唄としてこの種の唄を唄って作業をした名残りをとどめている証拠でもある。

このことから、当地方で盛んに唄われている祝い唄の「天神囃子」の前身は、生活に密着した仕事唄だったことがわかる。

七五五七四詞型の唄の分布

民謡のルーツを探る場合には、旋律と同時に唄の詞型も重要なポイントとなっている。現行民謡の八～九割までが、近世小唄調と呼ばれる七七七五調を基調としているのに比べ、天神囃子系の詞型は、

めでたいものは 大根種 花咲いて

実なりて俵 重なる

が示すように、七五七五調の変形で七五五七四という非常に珍しい詞型であり、元来は神社歌だったものが民間の田植唄や祝い唄に転化したものといわれている。

従って旋律も室町期の神事唄の系譜から生まれた関係で、ゆるやかなテンポで抑揚の少ない御詠歌や越天樂を彷彿とさせるものとなっている。

大正3年刊行の『俚謡集』、同4年刊行の『俚謡集拾遺』(文部省初の全国規模の民謡集で、長野県豊田村出身の高野辰之博士監修)にも、関東甲信越を中心にこの唄が数多く収録されている。

例えば、東京都では、麦打唄、餅搗唄。神奈川県では焼米搗唄、麦打唄から臼挽唄、粉挽唄、餅搗唄。千葉県では田打唄、麦打唄、麦搗唄、草取唄、神事唄。埼玉県では麦打唄、臼挽唄、祝言唄。山梨県では田植唄、草取唄、草刈唄、麦打唄、餅搗唄、臼挽唄、綿打唄、楮打唄、紙漉唄。長野県では田植唄。新潟県では田打唄、田植唄などの歌詞が集められている。しかし、関東地方の中でも、利根川の左岸、即ち茨城県や群馬県にはこれらの唄は遺存していなかったようである。

私達が実施した分布調査でも、中魚沼郡は田打唄、南魚沼郡塩沢町や六日町五十沢地区では田植唄だったし、長野県飯山市富倉、下高井郡木島平村、上水内郡信濃町柏原では、昭和30年代前半までこの系統の唄を田植唄として用いていたことが分かった。

神事唄・労作唄・祝い唄の系譜

次に古い文献から神事唄、労作唄、祝い唄の系譜をたどってみたい。

先ず、三河生まれの菅江真澄(宝暦3～文政12)が、天明3年(1783)から文化5年(1808)まで25年の歳月をかけて、近江を振り出しに信濃、越後、陸奥、そして蝦夷地まで足を伸ばして実地踏査をしてまとめあげた民謡記録集『麓廻一曲』(文化6年)の中に「信濃の国風俗田植歌」として、

めでたいものは 大根種 花咲いて

実なりて俵 重なる

など数種の唄が収められているし、同じく江戸後期の狂歌作家で黄表紙や洒落本をよくした太田南畝(寛延2～文政6)著の『麓廻塵』にも同種の唄が収録されており、上総国望陀郡(現君津郡)の菊間八幡宮の神事唄の中に、「女子祝言の時の曲を調べて舞い遊ぶ。その名を“はつせう”という」とある。

江戸後期の文化文政の頃には関東一円において、既にの種の唄は発声、初瀬、初卯瀬、初瀬卯などと呼ばれて祝い唄として盛んに唄われていたことをうかがわせる。

越後以外で現在祝い唄として歌われている所は、長野県飯山市富倉・同下水内郡木島平村・同上水内郡信濃町柏原・同木曾郡開田村・東京都大島村(伊豆大島)・千葉県香取郡多古町などである。

また、盆踊り唄としては、山梨県西八代郡市川大門町の市川大門金比羅節や長野県上伊那郡高遠町の竜勝寺山(どこいかまやせぬ)などがある。

天神囃子・大根種のルーツ

ところで、伴信友(安永2～弘化2)が天保6年(1825)に編纂した『中古雜唄集』(平安時代から室町時代までの舟唄、田唄、神事唄、今様、神楽唄などを収録)に、上総国菊間八幡宮神事唄(千葉県市原市)として、

同社の神主根本河内がいふ。毎歳祭礼の翌日八月十六日歟村中老婆共に来りて神前に盥に水をたたへ椀をうけて竹にてその椀をウ打ちて歌ふ。これをハツセといふ。発声の義なるべし。その歌、めでたきものはそばの花、はなさき実なりて、みかどとなるぞ、うれしき。

の一首が載っており、もともと神事唄だったことを証明している。しかし、我々の調査では、この神社に現在はこの風習は残念ながら遺っていないとのことであった。

しかし、同じ千葉県の佐原市にある香取神宮では、毎年5月5、6日の二日間(現在は4月第一土・日曜日の二日間)に亘って御田植祭の神事がとりおなされている。

この神事は神田耕作を通して稻作豊穣を祈願する祭事で、日本三大田植祭(伊勢神宮、住吉大社)の一つに数えられている。同市教委刊行の『佐原の民俗』(昭和51年)によれば、明徳2年(1391)及び嘉吉年中(1441～)の祭帳にこの模様が克明に記されており、その時唄われる唄の中に、

目出度いものは芋の種 ホー工ホ工

茎長く 葉広く子増やす ホー工ホ工

という歌詞が含まれていて、今もこの伝統ある行事が連綿と続いている。

こうして色々な資料から推察すると、今から600年前に上総地方で神事唄として唄われたものが、次第に仕事唄に取り入れられて関東甲信越一帯に広がり、更に江戸時代の中頃からは、“ハツセ”や“ほそり”と呼ばれる祝い唄に移行していくものと考えられる。

大根種の意味するもの

(三つもの・三つ重ね・三つぞろえ)

松阪・謙良節・土搗唄・御祝い・祝いめでた等、今日本で唄われている祝い唄には、主として松竹梅や鶴亀といったものが用いられているが、七五五七四の詞型で構成される祝い唄の類には、基本的に大根種・蕎麦の種(花)・芋の種の三つが用いられている。この三種の植物は古来よりめでたいものの代表格とされ、「三つもの」「三つ重ね」あるいは「三つぞろえ」と呼ばれている。

大根は、越年した種とり大根に5月から6月にかけて白い花が咲き、やがて黒々とした実がつく。よく観察すると一粒一粒の実は小さいけれども俵のような形をしており、実の付き具合はあたかも積み重ねた米俵を思わせるに十分である。

蕎麦は赤い茎に白い花で紅白を表し、やがて実がつくと種子(実)の形は三稜形で三角を御帝にかけている。

芋はというと里芋系の「ハッ頭」のこと。この芋は茎は長くて、葉は広く大きいのが特徴で、しかも根元に沢山の芋子がつくところから子孫繁栄を意味しており、いずれもおめでたいものとされている。

この光景を唄ったのが「目出度いものは大根種」で、豊穣を記念する農民の素朴な情感が込められている。この三つのキーワードが基となり、地域性も加味した多くの歌詞が次々と生まれ、200前後を数えるようになっているのである。従って祝言の時はもとよりの事、蔵開き・田打ち・田植え・建て前・水入れ等々、その時々によって唄う文句も自ずから異なってくるのは当然といえる。

ところで、時として「大穂種」と唄う人に出会うことがあるが、それは歌詞の意味を無視したこじつけに他ならない。調査の過程で、実は野中生まれの村山丑太郎氏(明治28年生)が若い頃、ある酒席で唄ったのが事の始まりであることがわかった。

やはり天神囃子を唄う際には、本来の意味を踏まえて、きちんと大きな声で正確に「大根種」と発音して欲しいものである。

なぜ天神囃子か

一連の労作唄や祝い唄として愛誦されて久しく、その間に各地で様々な歌詞が生まれ、現在では数百を数えることができるこの種の唄を総称して、魚沼

地方では“天神囃子”と呼んでいるが、いつ頃からどんな理由でそう呼ぶようになったのだろうか。

まず、この種の唄に関する越後最古の文献資料とされているのが、『塩沢組風俗帳』(文化2年)である。その中の田植えの項に、

植方は男女入交り唄うたい植申候

目出たいものは 大根種 花咲いて

実のりて俵ラ かさなる

思ひと恋を笠舟に 恋ハ浮き

おもひハしつミ 流るる

八王たの森に宿かれば 宵には鐘

夜明けは森の 巣鳥

など、同音にうたい植候、但種子蒔候日より十三日目を苗日と申して、此日は田植不仕候。

とあり、労作唄の型で収録されており、この時代はまだ現在のように祝い唄として用いられていなかったようである。

天神囃子が祝い唄として文献に現れて來るのは、明治20年代の終わりのことである。長岡の温古談話会刊(明治28年)の『越後風俗志』第八輯、俚歌の項に、「昔より目出度き酒盛りの終る時、一坐そろふて謡ふ歌を、てんじんばやしといふ。てんじんばやしの梅の花一枝手折って笠にさす、笠にさすよりも、なすざき(しまざきか)女郎衆のてにもたす。此歌魚沼へん専らなるを以て、うおぬまでんじん囃の名あり。所によりては田揆のおり謡ふを以て田内歌の名有」として収録されている。

この“てんじんばやしの梅の花”的型は、八五八五八八五で大根種の七五五七四の詞型とは全く異なるもので、唄の成立年代も降るものと思われる。そしてこの歌詞を唄う地域は、十日町市下条を中心に中条平場から飛渡地区、下条に隣接した小千谷市岩沢、それに信濃川対岸の川西町橋、仙田地区、小千谷市真人地区である。この地域では天神囃子の事を「テホジンバヤシ」「テホジバヤシ」「テホージ」と独特な呼び方をする。今、仮にこの地域を「テホージ文化圏」と呼んでおきたい。

ところで、下条原村には郷社天満宮が鎮座している。建立年代は応和2年(962)と伝えられ、『神社明細帳』(明治16年)には、天喜3年(1055)の記録があり、越後三十一社中妻有ではただ一社この天満宮が記載されてのみである。社領は一町一反余(明細帳では一町六畝十二歩)を有し、参道を中心に境内には21本の大木が繁り、神社の裏手にかけては

三千本の木が繁っていたと記録に残っている。その一部に梅林があり、春の例大祭にはゴザを敷き梅を愛で酒を酌み交わし天神囃子を唄ったと伝えられている。

妻有地方は有数の出稼ぎ地帯であり、昔は雪消えの早い刈羽や三島郡方面へ田打ちの出稼ぎが盛んで、地域ごとに行き先が決まっていた。下条や中条の人達は、主として三島郡西越村や出雲崎方面だった様である。そこは近くに島崎川が流れ、新潟との間に舟運が栄え、上流部の拠点だった島崎には最盛期の頃は川の両岸に50軒もの回船問屋や舟宿が軒を連ねていた。そこには出雲崎や寺泊のような本格的遊廓こそ無かったものの舟乗り相手に、美人で気立てのよさを売りものにした飯盛女や夜鷹と呼ばれる商売女が夜の巷に徘徊していた。これらの女性は船乗りのみならず、近郷近在の若者や季節労働者の間でも大変なもてようで、いわゆる島崎女郎の名で人気を博していたようである。

それではなぜ、妻有地方で唄われる祝い唄の文句に島崎女郎が登場してこなければならなかつたのか。恋唄でもあるこの唄の歌い出しの文句、即ち「天神ばやし」はどうして祝い唄の代名詞にまでなつたのか。その辺のいきさつを私なりにかなり大胆に推理してみたい。

原の天満宮での観梅の折り、花見客の中に島崎女郎を馴染みに持つ男がいて、見事に咲き誇る花や枝ぶりを眺めているうちに、ふとその子の顔が脳裏をかすめ、酒の勢も手伝ってか、即興的に口をついて出たものが、いつも唄いなれていた大根種のメロディだったのでなかろうか。とに角、字余りの難しい文句を手際よく唄いあげている点では、かなりの歌い手だった事は想像に難くない。

その語呂の良さも加わって、口コミで次々に唄が広まり、いつか天神ばやしの呼称が定着していったのではなかろうか。それは江戸時代末期から明治の始めにかけての事と考えられる。

ともあれ、地域ごとに節回しが違う所に民謡の良さがある。いつまでも地域の唄を大事にし、その良さを後世に引き継いで行きたいものである。

付記

本論は、著者が十日町青年学級の講師をしていた折り、昭和52年の学習テーマで取り上げ、学級生とともに調査を実施し、その後独自に2年をかけて不足資料を蒐集して、昭和55年に作成した報告書が基礎となっている。平成13年に新たに編集し直し、各地に残る唄を当時のカセットテープからCDに変換して加え出版した。興味のある方はそちらを参照し、視聴して欲しい。

愛宕山遺跡採集の舟底形石器

菅 沼 亘

はじめに

ここで紹介する舟底形石器は、1937年（昭和12）に市内の愛宕山遺跡において阿部虎次氏により採集され、1979年（昭和54）に阿部巖氏より市博物館に寄託された資料である。この石器については、既に紹介されているが（十日町市1996）、そこでは実測図を掲載して詳細な検討ができなかったため、今回、改めて報告したい。

遺跡の概要

愛宕山遺跡は市内河原町に所在し、市立十日町小学校の北西約250mに位置する（第1図）。遺跡は、信濃川右岸の河岸段丘（千手面）先端の平坦面上に立地する。遺跡のある台地は、東側を田川、西側を晒川に挟まれ、信濃川に向かって舌状に張り出している。現在、遺跡は愛宕山公園になっているが、当時はおもに畠地として利用されていた。

この舟底形石器は、1957年（昭和32）に中川成夫・芹沢長介氏などにより実施された中魚沼郡地域の考古学的調査においてその存在が初めて確認され、旧石器時代の遺物として報告されている（中川・芹沢ほか1958）。また、その際に現地踏査も行われ、安山岩製の石刃1点が採集されたということであるが、所在など詳細は不明である。

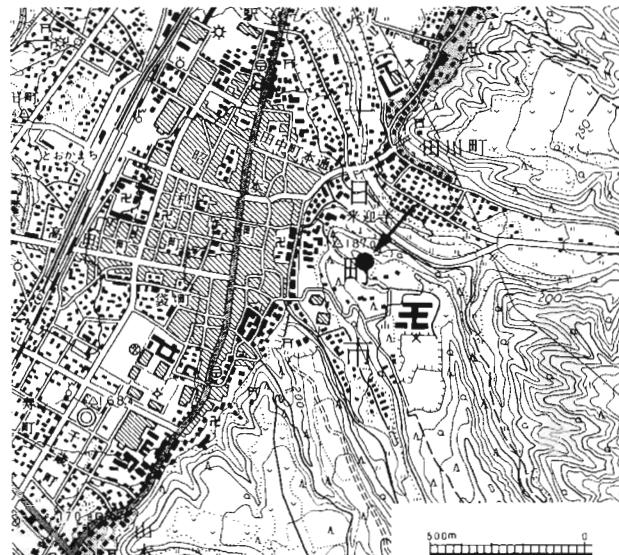
現在、十日町市において旧石器時代～縄文時代草創期の遺物が確認されている遺跡は、右の表のとおり本遺跡を含め9遺跡のみである。その中でも本遺跡は、当該期を代表する遺跡とされている。

石器の記載（第2図）

全体形は「し」の字状、断面形は逆三角形を呈するが、A面がB面に比して若干張り出している。

A面は、おもに下縁方向から粗い調整が行われた後に、下縁および甲板面（D面）縁辺に細調整が行われている。この細調整は、末端が階段状になるものが多い。また、側面に平坦な自然面を残しており、この部分には細調整が見られない。

B面は、下縁と甲板面から粗い調整が行われ、その後、A面と同様に下縁と甲板面縁辺に細調整が行われる。わずかであるが、側面に自然面を残す。



第1図 遺跡の位置 (1:25,000)

A面とB面の調整のあり方には違いがみられる。側面調整をみると、A面はおもに下縁方向から行われているのに対し、B面では下縁と甲板面から行われている。また、縁辺の細調整も、A面は下縁部が密、甲板面縁辺が粗であるのに対し、B面では下縁部が粗、甲板面縁辺が密になっている。この違いは、素材の形状を反映したものと推定される。

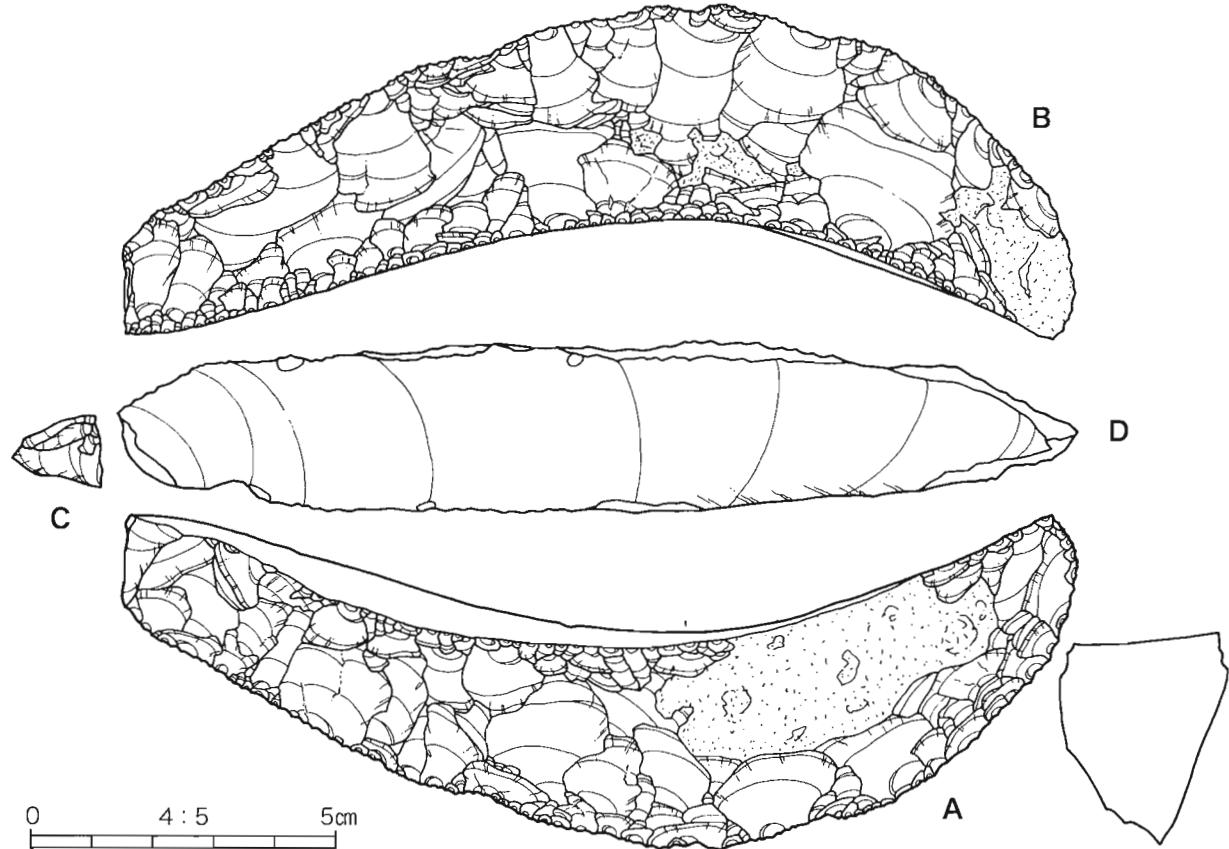
C面は、折れた面である。左端部に2条の細石刃様剥片の剥離痕が残るが、剥離されたと思われる剥片は長さ1.2cm、幅0.2cm前後であり、細石刃とはいがたい大きさである。欠損後の再調整であると考えられる。

D面は、素材となった礫の分割面であり、ほとんどねじれず平坦である。A・B両面に自然面が残ることから、扁平礫を長軸方向に分割して得られた分割礫が素材になっていると推定される。

法量は、最大長14.3cm、高さ3.58cm、最大厚2.70cm、重量181.23gを測る。石材は光沢のある珪質頁岩であり、色調は剥離面が褐灰色（10YR 6/1）、自然面が褐色（10YR 4/4）を呈する。

おわりに

これまでに、この舟底形石器については中村孝三郎氏により北魚沼郡川口町荒屋遺跡の細石刃核との類似が指摘されているが（中村1978）、前述したようにここでは細石刃核ではないと判断した。



第2図 愛宕山遺跡の舟底形石器

番号	遺跡名	所在地	時代	遺物	備考
1	南谷内館跡	大字馬場（土市第1）	旧石器	発掘：ナイフ形石器（1）、彫刻刀形石器（2）、削器（1）、石刃（9）	菅沼 1997
2	赤羽根	大字伊達（赤羽根）	旧石器	発掘：ナイフ形石器（1）	十日町市 1996
3	高島南原B	大字高島（高島第2）	旧石器	発掘：ナイフ形石器（2）	菅沼 1997
4	愛宕山	河原町	旧石器～草創期	表採：舟底形石器（1）	十日町市 1996
5	伊達八幡館跡	大字伊達（伊達第1）	草創期	発掘：有舌尖頭器（1）、両面調整尖頭器（2）	菅沼 2001
6	朴ノ木清水A	大字馬場（南雲）	草創期	発掘：有舌尖頭器（1）	菅沼 2001
7	江崎	大字馬場（土市第1）	草創期	発掘：両面調整尖頭器（2）	十日町市 1996
8	馬場神社	大字馬場（馬場第1）	草創期	発掘：両面調整尖頭器（1）	十日町市 1996
9	大井久保	大字馬場（珠川第2）	草創期	発掘：両面調整尖頭器（1）	菅沼 2001

市内の旧石器時代～縄文時代草創期遺跡一覧

舟底形石器は、細石刃文化～縄文時代草創期にみられる石器である。県内では、東蒲原郡上川村小瀬が沢洞窟遺跡において、隆起線文土器、尖頭器、有舌尖頭器、石鏃、棒状尖頭器（断面三角形の錐）、局部磨製石斧などと共に、小型の舟底形石器が出土している（小熊・前山ほか1993）。本遺跡資料は採集品で、共伴する遺物も不明であるため、その編年的位置付けは難しい。旧石器時代終末～縄文時代草創期のものであることは、まちがいないであろう。

参考文献

小熊博史・前山精明ほか 1993 「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『環日本海

における土器出現期の様相』日本考古学
協会新潟大会実行委員会

菅沼 亘 1997 「資料紹介 十日町市出土のナイフ形石器3例」『文化財課年報』1 十日町市教育委員会

菅沼 亘 2001 「資料報告 十日町市内出土の縄文時代草創期の尖頭器」『越佐補遺些』第6号 越佐補遺些の会

十日町市 1996 『十日町市史』資料編2・考古
中川成夫・芹沢長介ほか 1958 「妻有地方の考古
学的調査」『妻有郷』新潟県文化財年報
第三 新潟県教育委員会

中村孝三郎 1978 『越後の石器』学生社

V. その他の

1. 文化財関連博物館事業

平成14年度に行われた文化財に関する各種事業の概要を紹介する。

特別展

十日町ステージ越後妻有交流館の建設に伴い、「歴史遺産の十日町織物を保存し地域振興をはかる会」(以下、きもの保存会)が収集してきた貴重な織物資料が博物館へ移管された。これらの資料を夏季および冬季特別展にて公開した。

また、秋季特別展については、雪文化三館提携10周年を記念した企画展を開催した。

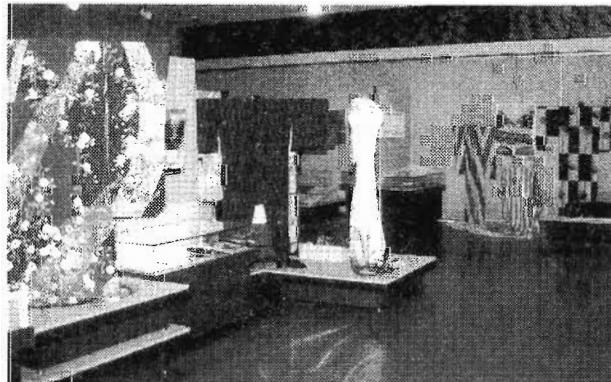
(1)夏季特別展

「きものでつづる十日町の歩み」

期間：6月15日(土)～6月30日(日)

会場：博物館 特別展示室

きもの保存会移管資料を中心として、透綾、明石ちぢみ、お召、十日町小絣など十日町産地の歴史を物語る織物資料他76点を展示。入場者数945名。



夏季特別展展示風景

◆記念講演会

「十日町織物の美と伝統性—継承と創造—」

期日：6月15日(土) 13:30～15:30

会場：博物館 ロビー

講師：川本敦久氏（金沢美術工芸大学教授）

十日町織物の歴史を風土と地域特性から検証し、その歴史と伝統を踏まえた美しいきものの町づくりを行っていくことが産地の発展ときもの文化の醸造につながるという説得力あるすばらしいお話を伺うことができた。また、基幹産業である織物に関わる講演であったため、地元の織物関係業者を含めた多くの方々から聴講していただいた。聴講者数80名。

(2)秋季特別展（雪文化三館提携10周年記念展）

詳細については、雪文化三館提携10周年記念事業の項で述べることとする。

(3)冬季特別展

「収蔵資料展—十日町のきものから…—」

期間：2月14日(金)～2月16日(日)

会場：博物館 特別展示室

第54回十日町雪まつり協賛事業として、きもの保存会からの移管資料を含む新収蔵資料を中心に、36点の織物資料を公開。期間中入場者数871名。

企画展

「現代アートに挑戦するインド民族アートの世界—インド民族アーティストとミティラー美術館のコラボレーション」

期間：4月26日(金)～5月19日(日)

会場：博物館 特別展示室

日印国交樹立50周年を記念し、ミティラー美術館(市内大池)との共催で行った。ミティラー画・ワルリー画・テラコッタなどミティラー美術館所蔵資料を展示。期間中の入場者数750名。

◆記念講演会「民俗アートへの新たなまなざし—非西洋美術の再評価—」 聽講者数 20名

期日：5月11日(土) 13:30～15:00

会場：情報館 視聴覚ホール

講師：半田昌之氏（たばこと塩の博物館学芸課長）

雪文化三館提携10周年記念事業

トミオカホワイト美術館(六日町)、鈴木牧之記念館(塩沢町)と当館は、平成4年に「雪の文化」を共通テーマとして姉妹館提携を結んでいます。今年度、提携10周年を記念して、三館を巡る企画展「北越雪譜と魚沼の風土」を共同開催した。展示内容としては、「北越雪譜」の著者である鈴木牧之の生涯を軸に雪譜に描かれた魚沼地方と雪国の中をたどり、雪が育んだ文化を紹介。富岡惣一郎の描いた洋画や書画・屏風などの牧之関係資料、冬の生活民具や越後縮の生産と商いに関する用具など、三館で互いに持ち寄った資料120点で展示を構成した。

開催初日には、トミオカホワイト美術館において開場式が催され、六日町長・塩沢町教育長・十日町

市長らによるテープカットが行われた。その後のレセプションには講演会と合わせて160名が参加、市町間の交流を深めることができた。

また、展示資料解説や講演会講師らの寄稿文を掲載した記念展図録を作成、各関係機関に配布した。



開場式（トミオカホワイト美術館）

《各館での展示期間と講演会内容等》

トミオカホワイト美術館

9/16(月)～10/1(火) 入場者数 865名

◆記念講演会「雪と縄文」

9/16(月) 14:00～ 聴講者数 160名

講師：小林達雄氏（國學院大學教授・新潟県立歴史博物館館長）

鈴木牧之記念館

10/8(火)～10/20(日) 入場者数 521名

◆記念講演会「北越雪譜の世界から」

10/19(土) 14:00～ 聴講者数 60名

講師：高橋 実氏（新潟県民俗学会常任理事）

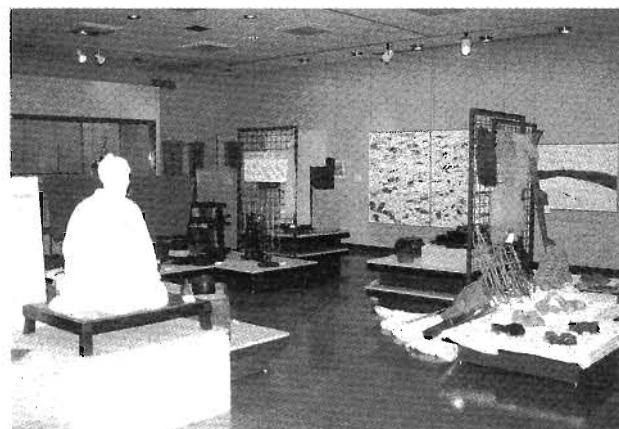
十日町市博物館

10/26(土)～11/10(日) 入場者数 673名

◆記念講演会「雪国地理誌—魚沼の風土と文化—」

11/4(月) 13:30～15:30 聴講者数 58名

講師：市川健夫氏（長野県立歴史館館長）



展示風景（十日町市博物館）

博物館講座

7月27日～8月17日の毎週土曜日に計4回開講。

今回のテーマは「道・人と地域をつなぐもの—地域と文化の交流を考える—」。各講師から最新の情報と知識を分かりやすく解説していただき、交易・交流、歴史や風俗の伝播・伝承、生活様式の変化等について受講者に理解を深めてもらうことができた。

《タイトルと講師および受講者数》

① 7/27(土) 善光寺街道をゆく人々 59名

講師：丸山克巳氏（前田町情報館長）

② 8/3(土) 織物技術の伝播を追って 44名

講師：坂本育男氏（福井県立博物館学芸員）

③ 8/10(土) 塩の道を歩く 48名

講師：土田孝雄氏（糸魚川市文化財保護審議委員）

④ 8/17(土) 海上の道—交易と交流 38名

講師：藤本 強氏（國學院大學教授）



講座風景 8/17

その他

文化財とは直接関連しないが、市民に地域の文化と文化財に関心を持っていただくために、博物館では以下のような事業を展開している。

(1)子ども博物館（博物館友の会共催事業）

小学4～6年生対象

①川の中をのぞいてみよう！信濃川で水遊び！

7/29(月) 参加者数 23名

②勾玉づくり

8/4(日) ※無料公開日 参加者数 10名

③シメナワとハッチンチョウをつくろう！

12/7(土) 参加者数 20名

④どんぐりクッキー＆どんぐりコーヒーをつくろう！

2/8(土) 参加者数 20名

(2)博物館無料公開日

8/4(日) 入場者数 264名

①勾玉づくり②昔の遊びをしよう！③収蔵庫公開

（林 真子）

2. 文化財資料の保存・活用

出張授業

昨年度に続き、総合学習の一環として市内の小学校より出張授業の依頼があった。日時などは、以下のとおりである。

日 時：平成14年6月27日(木) 10:30～12:20

場 所：下条小学校（視聴覚室）

対 象：6年生41人、先生2人

下条小学校での出張授業も今回で3度目である。先生からの依頼が、これまでと同様に下条地区の遺跡について話してほしいということであったため、まず、野首遺跡（縄文時代中・後期）の発掘調査の様子をスライドで説明した後に、子供たちに触れてもらいながら、持参した同遺跡の土器・石器の解説を行った。その後、子供たちからの質問を受けた。質問については、事前に先生から一覧を提出してもらっている。

下条小学校では、子供たちがそれぞれ①石器作りグループ、②竪穴住居造りグループ、③縄文料理チャレンジグループ、④アンギン編みグループにわかつて活動している。授業の終了後に書いてもらったアンケートや子供たちからの手紙を読むと、石器作りなどの体験学習への要望が強く感じられる。しかし、博物館ではこれらの対応ができていない状況であり、今後に残された課題である。



出張授業の様子

第3回 笹山じょうもん市

平成14年6月2日に第3回 笹山じょうもん市が開催された。博物館では第1回からこのイベントに協力している。今回も昨年と同様に「笹山土器コーナー」において、国宝指定外の復元土器や石器・土製品を展示し、参加者に笹山遺跡から出土した遺物に触れてもらった。

国宝修理保存事業

文化財課では、国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器群を未永く国民共有の財産として保存・活用するため、今年度より国・県から補助金の交付を受けて、国宝修理保存事業を開始した。平成17年度までに指定品57点のうち、比較的遺存率が高く、今後、貸し出しが予想される火焰型・王冠型土器11点の解体修理を実施する予定である。事業の全体計画は、以下のとおりである。

平成14年度 事業費：2,500千円

No.1・6 (火焰型) 計2点

平成15年度 事業費：4,003千円

No.4・8 (火焰型)・15 (王冠型) 計3点

平成16年度 事業費：4,570千円

No.7・10 (火焰型)・16・17 (王冠型) 計4点

平成17年度 事業費：3,037千円

No.2・14 (火焰型) 計2点

総事業費：14,110千円

今年度は、これまで3回の海外展に出展されるなど、修理に緊急を要する指定番号1・6の火焰型土器2点の修理を行った。作業は東京都内の文化財修理業者に委託され、期間は6月上旬～12月上旬である。以下、修理作業の概要をまとめる。

作業は、次にあげる①～④の手順で進められた。

①解体・クリーニング 接合・復元部分を解体し、土器に付着した石膏および接着剤を除去する。この際、土器内外面に付着しているススおよび炭化物などを極力落とさないように指示した。

②接合 パラロイドB72により補強処理しながら接合する。接合部の溝については補強のため、エポキシ樹脂（顔料混入）によって埋めている。

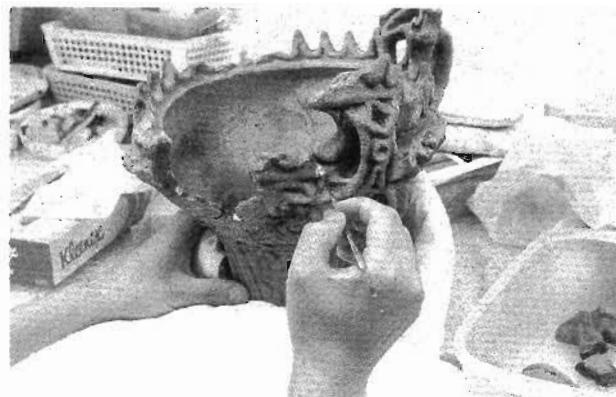
③復元 エポキシ樹脂により復元を行う。基本的に復元部分については、修理前の形状を参考に製作している。とくに鶴頭冠把手の遺存状況が悪かったNo.6については、No.1の把手をモデルとした。

④彩色 アクリル系顔料により、復元部分の外面は遺存部と同様の彩色をほどこし、内面では遺存部と区別できるように単色仕上げとする。彩色にあたっては、一般の人が土器に近づいて見ると、復元部分がわかる程度にした。とくに、No.1の胴部に見られる輪積み痕に沿った接合部については、この土器の製作・廃棄を考える上で重要であると思われたため、樹脂による充填がわかるような彩色を指示した。

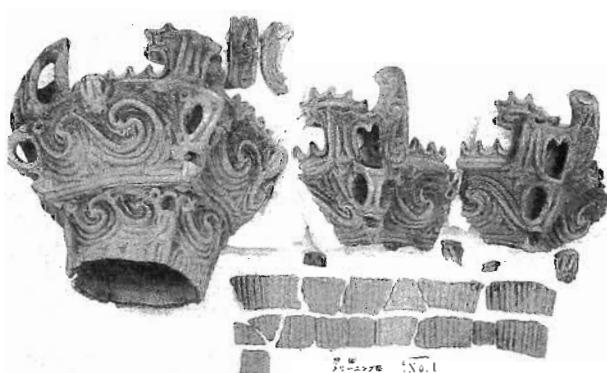
以上のはかに、保存箱（桐箱）も製作している。



解体・クリーニング作業



接合・復元作業



解体された指定番号1



解体された指定番号6



修理後

修理後の指定番号1

なお、作業を進める過程で、文化庁調査官、業者技師、文化財課担当職員の3者による作業打合せ(検収)を計4回(解体前・接合終了後・復元終了後・彩色終了後)行っている。また、平成15年2~3月



修理後

修理後の指定番号6

に博物館ロビーにてお披露目展示を行った。

最後になったが、お忙しい中いろいろとご指導いただいた文化庁の土肥 孝・原田昌幸調査官にお礼申し上げる。

(菅沼 亘)

3. 文化財資料の貸出

今年度の文化財（博物館）資料の貸出件数（平成15年1月31日現在）は、67件である。その内訳は、実物資料（レプリカ含む）14件、写真資料（転載含む）49件、その他4件となっている。

実物資料

特別展などへの貸出は、表1のとおり8件で、そのうちの7件は考古資料（レプリカ含む）、残りの1件は着物資料である。このほか、小・中学校の授業および地区公民館の各種事業に対し、千歯コキ、コネ鉢などの民具を貸出している。

国宝資料では、実物1件、レプリカ4件の貸出依頼があった。実物資料は、山梨県立考古博物館での特別展『技と美の誕生～名宝でつづる縄文文化～』に火焰型土器1点（No.8）、王冠型土器1点（No.17）の計2点を貸出している。レプリカは、『岡本太郎と縄文』展（株 NHKプロモーション）、『東北と縄文～縄文から未来へ 遙かなるメッセージ～』（株

創童舎）、『第4回 水なしサミット2002』などの特別展・イベントのほか、『夢の美術館～豪華決定版・国宝100選～』（NHK）のテレビ番組からも貸出しの依頼を受けた。

国宝（レプリカ含む）の貸出しにあたっては、当初、「国宝・笛山遺跡出土品の貸出しについて（内規）」（平成12年2月7日施行）に基づいて対応していたが、その後一部内容を改正し、現在は「国宝・笛山遺跡出土品の貸出に関する基準」（平成14年4月1日施行）として、貸出の条件を定め、貸出し可能な期間・回数・個数などを制限している。この貸出に関する基準は、基本的に文化庁から出されている国宝・重要文化財に関する基準、取扱要項、規定などに準拠したものである。

写真資料

取材・撮影や転載などを含めた写真資料の貸出件数は49件であり、表2に主要なものを示した。資料内容の内訳は、国宝（火焔型土器）24、考古展示（ジオラマ）5、雪（積雪期用具・年中行事など）6、着物（越後縮・明石ちぢみなど）4、信濃川1、アンギン3、その他（博物館全景など）6件であり、例年どおり国宝が半数を占めている。

使用目的別に見ると、教育（教科書）14、一般（歴史）8、雑誌（美術）1、パンフレット類（広報誌・会誌含む）11、放送（テレビ番組）2、特別展パネル・図録3、新聞記事1、その他（はがき・ホームページなど）9件である。
(菅沼 亘)

貸出先	特別展など	貸出資料	貸出期間	備考
株式会社 NHKプロモーション	『岡本太郎と縄文』展 会期：北海道立帯広美術館 5/24～7/3 鹿児島県霧島アートの森 7/10～8/21 大丸ミュージアム梅田 9/11～9/23	国宝・火焔型土器（No.1） レプリカ、 野首・大井久保遺跡火焔型土器 計3点	5/14～ 10/11	観覧料：800円（一般） 図録：『岡本太郎と縄文』
長野県立歴史館	『北村縄文人の時代～仮面土偶をつくった人びと』会期：5/25～6/30	栗ノ木田・野首・寿久保遺跡土器 計10点	5/13～ 7/14	観覧料：300円（常設展と共に）
山梨県立考古博物館	『技と美の誕生～名宝でつづる縄文文化～』 会期：10/12～11/24	国宝・火焔型・王冠型土器（No.8・17） 笛山遺跡火焔型土器（市指定） 計3点	10/3～ 12/4	観覧料：600円（一般） 図録：『技と美の誕生』
企画人事課	『縄文シンポジウム2002in長岡』 日時：11/16	野首・寿久保遺跡出土品 計13点	11/15～ 11/18	会場：新潟県立歴史博物館
克雪利雪対策室	『第4回 水なしサミット 2002』 日時：10/12	国宝・火焔型・王冠型土器 (No.1・6・15) レプリカ計3点	10/12～ 13	会場：十日町市民会館
株 創童舎	『東北と縄文～縄文から未来へ 遙かなるメッセージ～』 会期：11/25～12/13	国宝・火焔型土器（No.1） レプリカ 1点	11/19～ 3/1	会場：東北電力グリーンプラザ（仙台市）
N H K 日本放送協会	『夢の美術館～豪華決定版・国宝100選～』（テレビ番組） 放送日時：12/15、1/5	国宝・火焔型土器（No.1・6・8） レプリカ 計3点	12/14～ 12/16	
室礼三千	『室礼展・七夕』 会期：7/4～6	透綾・明石ちぢみ 計7点	7/1～10	会場：ミサワアートギャラリー室礼 (東京都新宿区歌舞伎町)

表1 実物資料の貸出一覧（レプリカ含む、2002.4～2003.2現在）

貸出先	出版物など	貸出資料	備考
十日町市中魚沼郡医師会	『新潟県医師会報』	縮	広報
(株)浜島書店	『学び考える歴史』 『総合歴史』	国宝・火焰型土器(転載)	教育
(有)アート・エフ	『新中学校歴史 日本の歴史と世界』(株)清水書院	秋の一日(転載)	教育
(株)学宝社	『補充学習／社会』	国宝・火焰型土器(転載)	教育
(株)小学館	『梅原猛著作集』第11巻・人間の美術	国宝・火焰型土器(転載)	一般(歴史)
(有)アート・エフ	『ポピー・社会6年 4・6月号』(全日本家庭教育研究会)	国宝・火焰型土器(転載)	教育
北越急行(株)	『ほくほく線沿線ガイド』	国宝・火焰型土器(ポジ)	広報
(株)マガジンハウス	『BRUTUS 日本美術特集』508号	国宝・火焰型土器(ポジ)	雑誌(美術)
(株)類設計室	暑中見舞い用はがき	国宝・火焰型土器(転載)	その他
北越急行(株)	『十日町駅からぶらり散歩道』	博物館全景(カラープリント)	広報
(株)創童舎	『電力株式会社 海外向けアニュアルレポート2002年度版』	国宝・火焰型土器(ポジ)	広報
企画人事課	『季刊 新往来』(農水省発行)	国宝・火焰型土器(プリント)	広報
(株)山川出版社	『日本史リブレット2 繩文時代の豊かさと限界』(今村啓爾著)	国宝・火焰型土器(白黒プリント)	一般(歴史)
(株)碧水社	『卑弥呼の時代を復元する』(学習研究社)	栗ノ木田遺跡配石墓(ポジ)	一般(歴史)
徳島県立博物館	企画展「古代のわざ」展示パネル・図録	国宝・火焰型土器(ポジ)	特別展図録
(株)小学館	『週刊 日本の美をめぐる』第31回配本	国宝・火焰型土器(転載)	一般(歴史)
朝日新聞社出版局	『週刊朝日百科 日本の歴史』第33号	国宝・火焰型土器(転載)	一般(歴史)
(株)正進社	『3年間の総整理問題集 社会』	国宝・火焰型土器(カラープリント)	教育
商工観光課	市観光パンフレット	越後縮・明石ちぢみ(ポジ)	広報
(株)文溪堂	『社会科資料集6年 2002年版』	展示・豎穴のすまい(転載)	教育
(株)光文書院	『社会科資料集6年』	展示・冬の一日(ポジ)	教育
NHK教養番組部	番組ホームページ	国宝・火焰型土器(ポジ)	広報
商工観光課	年賀はがき	国宝・火焰型土器(ポジ)	広報
克雪利雪対策室	「第4回水なしサミット2002」展示パネル	信濃川関係(白黒ネガ)	その他
商工観光課	市観光パンフレット	新水のハネッケーシ(プリント)	広報
(株)文溪堂	『社会科資料集6年 2002年版』	国宝・火焰型土器(ポジ)	教育
光村図書出版(株)	高校美術教科書『美術I・教授資料』	国宝・火焰型土器(ポジ)	教育
富士見市立水子貝塚資料館	企画展「富士見市の発掘30年」図録	アンギン編み工具(転載)	特別展図録
南メディア・エディトリアル・ビューロウ	『はじまりのものシリーズ』(リブリオ出版)	アンギンを編む(ポジ)	一般(歴史)
農林課	『会報にいがた』	国宝・火焰型土器(カラープリント)	広報
中条地区公民館	『中条再発見講座』	大井田城跡ジオラマ(カラープリント)	その他
(株)第一印刷所	『きらら』(第四銀行)	博物館全景(カラープリント)	広報
共同通信社	連載企画「にっぽん往還」	国宝・火焰型土器(カラープリント)	新聞
東小学校	市社会科副読本	鳥追いほか(プリント)	教育
羽生淳子(カリフォルニア大学)	縄文時代概説書(英文)	国宝・火焰型土器(ポジ)	一般(歴史)
NTT番号情報(株)	『タウンページ』	博物館全景(カラープリント)	広報
表参道・新潟館ネスパス	『雪国の暮らし体験講座』展示パネル	雪の結晶(プリント)	その他
(株)学習研究社	『日本人の暮らし大発見』第3巻	国宝・火焰型土器(転載)	歴史(一般)
(有)ムック	『トップサマー国語2年』 『夏の補充セミナー国語2年』	展示・豎穴のすまい(転載)	教育
カシヨ(株)	『長野商工会議所だより』2月号	カンジキ(白黒プリント)	広報

表2 写真資料の貸出一覧(主要なもの、2002.4.1~2003.1.31現在)

資料

十日町市の指定文化財一覧

平成15年3月31日現在

(国宝)

番号	種別	名 称	員 数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	備 考
1	考古資料	笛山遺跡出土深鉢形土器57点 (附 土器・土製品類ほか871点)		平成11. 6. 7	西本町1	十日町市 (博物館)	縄文時代

(重要文化財)

番号	種別	名 称	員 数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	備 考
2	有形民俗	越後縮の紡織用具及び関連資料	2098点	昭和61. 3.31	西本町1	十日町市(博物館)	江戸～明治時代
3	有形民俗	十日町の積雪期用具	3868点	平成 3. 4.19	西本町1	十日町市(博物館)	江戸～昭和30年代

(新潟県指定文化財)

番号	種別	名 称	員 数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	備 考
4	建造物	神宮寺観音堂・山門	2棟	平成 3. 3.29	四日町	神宮寺	江戸期
5	絵 画	山水図釣雲泉筆六曲屏	1 双	昭和29. 2.10	山本	関口芳央	江戸時代末期
6	彫 刻	木造十一面千手観音立像	1 軀	昭和46. 4.13	四日町	神宮寺	平安時代後期
7	彫 刻	木造四天王立像(伝広目天・伝毘沙門天)	2 軀	昭和49. 3.30	四日町	神宮寺	平安時代末期
8	有形民俗	越後縮幡	74 旒	昭和49. 3.30 追加50. 3.29	吉田山 谷ほか	吉田社ほか6 社(博物館)	江戸～明治時代
9	史 跡	大井田城跡		昭和53. 3.31	中条	十日町市	南北朝期
10	天然記念物	小貫諫訪社の大スギ	1 本	昭和53. 3.31	小貫	諫訪神社	幹周8. 33m

(新潟県選定保存技術)

番号	種別	名 称	員 数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	備 考
一	選定保存技術	十日町茅葺職人	4 人	平成12. 3.31	—	—	神宮寺観音堂・山門対象

(十日町市指定文化財)

番号	種別	名 称	員 数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	備 考
11	建造物	智泉寺山門	1 棟	平成 6. 3.23	昭和町3	智泉寺	江戸時代中期
12	建造物	觀泉院山門	1 棟	平成 7. 3.24	土市	觀泉院	江戸時代中期
13	絵 画	一遍上人絵詞伝	8 卷	昭和54. 9.12	川原町	小林賢有	江戸時代中期
14	彫 刻	木造阿弥陀如来立像	1 軀	平成 8. 3.21	川原町	来迎寺	鎌倉時代後期
15	彫 刻	木造聖観音立像	1 軀	平成13. 3.22	新宮	竜王山講中	戦国期末
16	工芸品	越後縮裂見本帳	2 冊	昭和47.11.28	本町3	蕪木孫右	江戸期
17	工芸品	十日町市織物歴代標本帳	47 冊	昭和62. 2.23 追加 1. 2.16	西本町1	十日町織物工業 協同組合(博物館)	明治25年～昭和13年 明治42年～昭和8年
18	工芸品	縮間屋加賀屋の御用縮み及び関連資料	110 点	平成 2. 6. 8	西本町1	蕪木元昭(博物館)	江戸時代後期
19	工芸品	宮本茂十郎手織の透綾(絹縮)裂地	3 点	平成13. 3.22	西本町1	十日町織物工業 協同組合(博物館)	幕末～明治初
20	有形民俗	越後アンギン及び関連資料	一括	平成11. 3.16	西本町1	十日町市(博物館)	江戸～明治時代
21	古文書	太子堂村検地帳	4 点	平成12. 3.21	西本町1	若井基八郎(博物館)	中世～江戸時代初期
22	考古資料	馬場上遺跡出土品	一括	平成 2. 2.22	西本町1	十日町市(博物館)	古墳時代中期～平安時代
23	考古資料	笛山遺跡出土品(国指定分を除く)	一括	平成 2. 2.22	西本町1	十日町市(博物館)	縄文時代、中世
24	考古資料	伊達八幡館跡出土品	一括	平成11. 3.16	西本町1	十日町市(博物館)	中世
25	考古資料	幅上遺跡出土品	一括	平成12. 3.21	西本町1	十日町市(博物館)	縄文時代

番号	種別	名 称	員 数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	備 考
26	歴史資料	旗指物	1 旗	昭和55. 4.11	六箇山谷	富井清孝	江戸時代初期
27	歴史資料	明和元年の俳句献額	1 面	平成14. 3.21	四日町	神宮寺	江戸時代後期
28	歴史資料	安永七年の俳句献額	1 面	平成14. 3.21	諏訪町	十日町諏訪神社	江戸時代後期
29	無形民俗	赤倉神楽		昭和51.11. 8	赤倉	赤倉神楽保存会	
30	無形民俗	大の坂		昭和59. 1.26	中条旭町	中条大ノ坂保存会	
31	無形民俗	新保広大寺節		昭和59. 1.26	下条本町	新保広大寺節保存会	
32	無形民俗	新水のドウラクジン(道楽神) とハネッケエーシ(羽根返し)		平成 7. 3.24	新水	新水地区	
33	無形民俗	水沢の石場かち		平成15. 3.24	土市	水沢地区伝統芸能保存会	
34	工芸技術	越後アンギン制作技術		平成11. 3.16	西本町1	越後アンギン伝承会	
35	史 跡	四日町神宮寺境内地及び山林		昭和47.11.28 追加49. 6.11	四日町	竹内道雄	江戸期
36	史 跡	大黒沢正平在銘梵字碑	1 基	昭和51. 1.10	大黒沢	村山キノエ	南北朝期
37	史 跡	鉢の石仏		昭和53. 1.28	鉢	鉢石仏保存会	江戸期民間信仰跡
38	史 跡	笛山遺跡		平成 4.12. 3	中条上町	岩田栄十郎ほか	縄文時代
39	史 跡	羽川(秋葉山)城跡		平成10. 3.25	六箇麻畑	麻畑・羽川城跡保存会	戦国期
40	名 勝	積翠荘		昭和55. 4.11	吉田山谷	酒井うめ子	江戸期
41	天然記念物	姿箭放神社大ケヤキ	1 本	昭和63. 7.20	姿	箭放神社	樹齢約550年幹囲5.14m
42	天然記念物	高麗神社社叢		平成 1.10. 3	背戸	高麗神社	
43	天然記念物	安養寺松尾神社の大スギ	1 本	平成 4. 3.21	安養寺	安養寺地区	樹齢約500年幹囲7m
44	天然記念物	安養寺円通庵の三本スギ	3 本	平成 4. 3.21	安養寺	安養寺地区	樹齢約500年
45	天然記念物	枯木又龍王池とカスミザクラ 及び三本スギ	1ヶ所 1本3本	平成 6. 3.23	枯木又	枯木又	枯木又地区
46	天然記念物	入山のカスミザ克拉	1 本	平成 9. 3.24	入山	入山	山本丑松

■指定文化財管理委託料

(単位: 円)

《県指定文化財》

史跡 大井田城跡 61,200

天然記念物 小貫諏訪社の大スギ 18,000

《市指定文化財》

建造物 智泉寺山門 18,000

建造物 観泉院山門 18,000

史跡 四日町神宮寺境内地
及び山林 61,200

史跡 大黒沢正平在銘梵字碑 18,000

史跡 鉢の石仏 61,200

史跡 羽川(秋葉山)城跡 61,200

名勝 積翠荘 36,000

天然記念物 姿箭放神社の大ケヤキ 18,000

天然記念物 高麗神社社叢 61,200

天然記念物 安養寺松尾神社の大スギ 18,000

天然記念物 安養寺円通庵の三本スギ 18,000

天然記念物 枯木又龍王池とカスミ

ザクラ及び三本スギ 36,000

天然記念物 入山のカスミザ克拉 18,000

(合計) (522,000)

■指定文化財管理補助金

(単位: 円)

無形文化財 赤倉神楽 30,000

無形文化財 大の坂 30,000

無形文化財 新保広大寺節 30,000

無形文化財 新水のドウラクシン(道楽神)と
ハネッケエーシ(羽根返し) 30,000

(合計) (120,000)

編集ノート

文化財課年報7をお届けします。

長引く不況のなか、市財政の慢性的悪化が叫ばれ続けいます。当然、そのしづ寄せは文化財行政にも及んできます。その中でほぼ予定した事業を消化できホッとしているところです。

国宝火焰型土器の保存修理事業の開始、馬場上遺跡発掘調査報告書の刊行、懸案だった笛山遺跡史跡指定地の未同意地権者の合意も得ました。

一方文化財保護と密接に関わる様々な問題も発生しています。旧滝文社屋の保存問題、旧きもの歴史館所蔵資料の受け入れと保存、宅地開発による遺跡の破壊対応などです。また、市町村合併に伴う様々な問題も見え隠れしています。

文化財は現代に生きる私たちだけのものではなく、優れた先人の遺産として後世に伝えていかなければならぬもののはずです。とすれば、単に経済効率や対費用効果では計ることが不適切であり、人としての存在認識や感性、知性教養、文化価値や理解などの視点や見識が必要となります。こうした視点への理解を欠くと、将来に禍根を残す事になるのではないかでしょうか。

そのためにも、行政に携わる我々職員は、日々の学習と研鑽に努めるとともに、保存・伝承・活用などの文化財行政の望ましいあり方を追求することが益々重要になると思います。

ともあれ、ささやかな記録ではありますが、是非ご一読いただき、ご指導やご鞭撻をいただきたくお願い申し上げます。

また、文化財課の事業や活動においては、関係機関・団体をはじめ指定文化財の管理者の皆さん、発掘調査作業員の皆さん、関係業者の皆さん等大勢の方々のご支援・ご協力をいただいています。ここに紙面を借りて、厚くお礼申し上げます。

(竹内)

■文化財課・博物館職員（平成14年度）

文化財課長	上村 松雄	（兼）
文化財係長	竹内 俊道	文化財主事
主任	太田 喜重	
同	菅沼 豆	文化財主事
主事	岩田恵美子	（兼）〈4/1~9/6〉出産・育児
同	林 真子	（兼）
同	富井 寛人	（兼）
嘱託	阿部 恭平	
同	中澤 幸男	（博物館）
臨時職員	阿部 範子	（博物館）〈9/5~3/31〉
同（隔日）	板橋 恭子	（博物館）〈4/16~12/17〉
同（隔日）	田村 明美	（博物館）〈4/16~12/17〉
補助職員	山田 敏枝	
同	上野 洋子	
同	山口真佐子	（博物館）
調査補助員	高橋 桂子	〈6/3~10/29〉



十日町市教育委員会 文化財課年報 7

発行日／平成15年(2003)3月31日
編集・発行／十日町市教育委員会
文化財課

〒948-0072 新潟県十日町市西本町1丁目
十日町市博物館 内
十日町市教育委員会文化財課
TEL(0257)57-5531
FAX(0257)57-6998

印刷／株 滝沢印刷